

つるみの風

つるみの風 第50号
2023年4月1日発行
鶴見聖契キリスト教会
〒230-0074 横浜市
鶴見区北寺尾1-16-7
TEL 045-572-0857

復活の朝

●毎朝のおはようございます

この原稿を書いているのは、何を隠そう（何も隠してはいませんが）、二〇二三WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）決勝戦の翌朝です。国別対抗で野球世界一を決めるこの国際試合は、二〇〇六年に始まった、まだ歴史の浅い世界大会ですが、今回は異様な盛り上がりでした。V9、巨人の星世代の筆者には、年度末の多忙な折、胸にヒリヒリ来るような試合の連続で仕事にならず、困りました。昨年来の暗い世相の中、今年も変わらず桜の季節がめぐってまいりましたが、鶴見の皆さまいかがお過ごしでしょうか。



さてWBC、歴史と記憶に残る名場面は数知れずあったのですが、TV解説者の「おはようございます！」というコメントが妙に心に残っています。それは、今年の三冠王ながらWBCで不振にあえぎ、準決勝一点ビハインドの最終回、ここぞという場面でフェンス直撃のサヨナラヒットを打った若き三塁手の「復活」を言い当てたことば。眠れる獅子、悩める虎がつかい目を覚ました、そんな感覚でしょうか。翌日の決勝戦でも相手チームがホームランで先制した直後に会心の特大ホームランをかっ飛ばして同点にし、今度は別の解説者が「完全復活！」と叫んでました。

あなたは人をちりに帰らせませぬ。「人の子らよ、帰れ」と言われます。まことに、あなたの目には千年も、昨日のように過ぎ去り夜回りのひと時ほどです。あなたが押し流すと、人は眠りに落ちまます。朝には、草のように消えていきます。朝花を咲かせても、移ろい夕べには、しおれて枯れています。（旧約聖書 詩篇九〇・三〜六）

実はこの詩篇九〇篇、キリストの多い詩です。人のいのちのほかなさ、短さ、そして眠りのように死は訪れ、翌朝にその存在が消えている。

時はモーセから千数百年後、あのイエスがラザロを死からよみがえらせるため、危険なユダヤへ行こうとする際にも、こんなやりとりが交わされました。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいましたが、わたしは彼を起しに行きます。弟子たちはイエスに言った。「主よ、眠っているのなら、助かるでしょう。イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました」（新約聖書 ヨハネの福音書一一・一二〜一四）。

さらに数年後、初代教会の指導者の一人ステパノがユダヤ当局の恨みを買って、偽証によりユダヤ議会へ引き出され、私刑の殉教を遂げる直前の場面を、記者はこう記します。「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください」。そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」。こう言って、彼は眠りについた」（新約聖書 使徒の働き七・五九〜六〇）。

ということばは、やがての目覚めを予感させますね。そう、それが復活の時です。



●イエスの「おはよう」

さあ、イースター（復活祭）の本題に入りましょう。人類を死と罪の力から解放するため、神が人となってこの世に生まれ

たイエスは、力による支配で不埒な人類をねじ伏せる王ではなく、罪人を愛し、仕える王としてご自身を示されました。誇り高き選民イスラエルを牛耳る異邦人ローマ帝国からの、政治的解放を期待していた民衆は失望し、イエスの登場で既得権益を失うことを恐れたユダヤ宗教指導者層からの恨み憎しみと呼応して、ついにイエスは逮捕され、おぞましき十字架刑に処せられました。しかし、物語はそこで終わることはなかったのです。

足掛け三日後の日曜日早朝、イエスに仕えた女たちがイエスの葬られた墓を訪れると、御使いが現れてこう伝えます。「あなたがたは、恐れることはありません。十字架につけられたイエスを捜しているのはわかっています。ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。さあ、納められていた場所を見なさい」（新約聖書 マタイの福音書二八・五〜六）。

そして、こう続きます。「彼女たちは恐ろしくはあったが大いに喜んで、急いで墓から立ち去り、弟子たちに知らせようと走って行った。すると見よ、イエスが「おはよう」と言っていて彼女たちの前に現れた。彼女たちは近寄ってその足を抱き、イエスを拝した」（八〜九）。

●私の「おはよう」

この「おはよう」には無限の価値と意味が含まれているように思えます。イエスが死から復活し、罪と死の力に勝利して、イエスに信頼する者を罪と死から救い出してくださったことを確認させます。イエスがまずよみがえったことで、続く私たちは、たとえ死が訪れたとしてもやがての日に必ず復活するとの確証を得、神とともに生きる永遠のいのちを先取りした「今」を生きたことが出来るようになった。私たちにもイエスにあってホンモノの「朝」が訪れたのです。

実話に基づいた映画「レナードの朝」（原題「目覚め」）で、嗜眠性脳炎により三十年間も硬直の中に閉じ込められていたレナードは、パーキンソン病の新薬で目覚め、他の患者たちもそれに続いて、生きる喜びを噛み締めます。薬の効果は一時的で、レナードをはじめ皆はまた彼方へと戻って行き、主治医は「自分の施した治療は彼らに幸せをもたらしたのか」と嘆くのですが、そこに真実な愛の交流が確る看護師が証言。邦題「レナードの朝」はとても心に響きます。

そして、あの日死からよみがえられたイエスの、人類に約束された「おはよう」は決して一時的なものではないと確信します。それはイエスの復活が作り話でも神話でもなく、目撃証言に基づいた歴史の事実だから、死の世界にいのちが、暗闇に朝が訪れた出来事だからです。エルサレム郊外の「園の墓」入口の扉には「彼はよみがえってここにいない」と書かれ、空の墓がイエスの復活を伝えています。

●おまえに任せたら生きよ

WBC・侍Jの監督は、あの一点を追う準決勝九回裏、無死一、二塁の場面で打順が回った、一〜三打席連続三振・四打席目三邪飛の絶不調五番打者に、コーチを遣わしてことばを伝えます。当の本人は、送りバント指示か、代打交代かといぶかるも、内容は「ムネ（打者の愛称）、おまえに任せろ。思いきっていいってこい」。監督は、後がない大一番で彼の復活を信じたのです。この絶大なる信頼で肝が据わった彼は腹をくくり、開き直りました。一球目のファウルで感触をつかみ、二球目の低めボールをきちんと見送り、三球目をジャストミートして、一塁走者をも生還させるサヨナラ長打を放ったのでした。涙が出そうなシーンですね。歓喜に沸き立つチームメイトをカメラが映す中、解説者の口から飛び出したのが、例の「おはようございます」。まさに言い得て妙でした。

あの日の朝、死の墓を訪れた女たちに、死からよみがえって「おはよう」とあいさつしたイエスは、生きるしんどさに喘ぐ私たちにも「おはよう」と声をかけているように思います。ことばがぶつきらばうで恐縮ですが、「おはよう。おまえの人生はおまえのものだ。わたしは復活したから、今がどういう状態でも、わたしに信頼するならば、おまえも復活する。いや、すでに今、よみがえっている。わたしはおまえの人生をおまえに任せろ。思いきって生きてみよ」と。

イースターおめでとーございませぬ。

あんなにやさしいおはようございます。

